

びわこの 考湖学

— 第2部 —

53

己高山は、近江、若狭、美濃にまたがって延びる伊吹山系の一部をなす標高922mの山です。

「己高山縁起」によると、己高山は行基により開基され、泰澄が道場を建てた後、最澄が高尾で修行中に白山白翁の託宣を受け、この寺院を復興しました。再建された本堂は三間四面で、本堂他にも十社権現と呼ばれる鎮守社や八坊の僧舎があったと記されています。

その一つ、鶏足寺跡はこの山頂より西に延びる尾根を下った標高820m前後の日当たりの良い南側斜面に立地します。遺跡は観音堂跡といわれる基壇、塔跡がある広い平坦面を中心に約12カ所の平坦面があり、残存する基壇や露出している礎石から8棟以上の建物跡を確認することがで

きます。一部には池と鳥、滝口が2カ所ある庭園跡も見ることが出来ます。これらの伽藍に立つと、ほぼ近江一国を一望する絶景が迎えてくれます。

この山頂付近で現在見られる遺構は、発掘調査によって「己高山縁起」にある永徳元(1381)年に行われた本堂再建供養時の記録とほぼ一致することがわかりました。調査では創建期の遺構は検出できなかったものの、出土した須恵器から、寺の創建が8

寺跡への道中の六地藏



末頃には無住となり、昭和8年に焼失してしまいました。その後、麓の飯福寺と合併しますが、昭和38年にはそれも無住となりました。

己高山には鶏足寺のほか、法華寺、石道寺、観音寺、高尾寺、安楽寺などの寺名が文献にもみえ、古代から中世にかけて山頂から山腹周辺に己高山の山号を称する多くの寺坊がありました。今ではほとんど麓に下りてしまいました。

山上にあった己高山関連の文化財は、今は麓の己高閣・世代閣に収蔵され、地元の人々によって手厚く護られています。

中でも木造葉師如来立像と十二神将は奈良唐招提寺木彫群の影響が明らかな造像で、全国的にも数少ない奈良時代末期の南都派木彫であり、寺の草創期の様相を示すものと

して重要です。また七軀の群像で表される七仏葉師は、鎌倉時代頃のもので他に類例が少なく大変貴重です。七仏葉師信仰は古い天台系の密教修法によるもので、己高山と天台の関係を窺わせる尊像としても注目されます。

山頂へは麓の己高閣近くの登山口から約三時間。道はわかりやすく、足場も悪くないものの、やや急な傾斜に修行の山であることを思い知らされます。登り始めから約一時間の馬止めの岩辺りからの眺望は絶景です。そこからしばらく進んだところにある広々とした場所が鶏足寺跡です。

礎石、庭跡に往時の隆盛が感じられるとともに、とても落ち着いた空間です。ここから山頂へはもう一息、最後にとてもきつい傾斜を登ると頂上に着きます。

山の靈気に打たれ、絶景の琵琶湖を望み、数奇な運命をたどった仏様達に出逢える己高山は、まさに湖北の靈峰のひとつです。(滋賀県埋蔵文化財センター 小竹志織)

己高山

数奇な運命をたどった仏様